芸能

劇団うりんこ「ねむるまち」

安住恭子の舞台プリズム

静かだが濃密な空気つくる

児童劇は普通、明るく！元気に！楽しく！と作られる。この〈！〉の強さによって子供たちの心をつかもうとするからだ。けれども今回、スウェーデンのバーント・フーグルンドが作・演出した劇団うりんこの「ねむるまち」は、それとは違ってひそやかな気配の静かな静かな児童劇だった。

人生で味わう6つの気持ちを描いた「ねむるまち」

その気配の演出は開演前から始まっていた。観客が心を潜ませて劇場に入り、そっと席に着くように俳優たちが導いていく。そして言葉の説明ではなく、声や楽器のささやきで風や雨、夜の静けさを実感させ、次第に物語に引き込んでいく。つまり静かだが濃密な空気を繊細につくり、劇場全体に染み入らせるのだ。

そして物語もユニークだった。描かれたのは、ある町の夜の物語。町の家々の模型を一つ一つ取り上げ、そこに住む人がどんな夢を見ているかを語っていく。散歩の帰りに道に迷っているおじいさん、買い物依存症の女、クッキー作りの失敗におびえるおばあさん等々。みんな何かしら心の不安がのぞいたような悪夢を見ている。

もちろん最後は朝になり、悪夢は終わる。その人たちが町で出会い、交流し合うことで互いに元気を取り戻す。孤立するのではなく、交流し合おうと呼びかける内容だ。けれどもそれを伝えるのに、孤立と孤独をきちんと見せるのだ。子供たちも静かにそれを受け止めていた。それらを語る語り口に、繊細な中にも芝居の面白さが詰め込まれていたからだ。この児童劇には子供の感受性への信頼があった。（8月22日、名古屋市名東区のうりんこ劇場）